京都大学経済学部同窓会会報

京都大学経済学部同窓会 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学経済学部内

ごあいさつ
―経済学部のこれから―

京都大学経済学部同窓会理事長
大学院経済学研究科長
経済学部長
植田和弘

本年四月より大学院経済学研究科長・経済学部長に就任致しました植田和弘でございます。そして、同じ四月から経済学部同窓会理事長にも就任致しました。同窓生の皆様からのこれまでにも増してのご指導とご鞭撻を心よりお願い申し上げる次第です。

『京都大学経済学部八十年史』によりますと、京都大学経済学部は「大正八（一九一九）年四月に法科大学が法学部に変更された後、勅令第二五五号にもとづいて、同年五月二十八日付で法学部から経済学部が新たに分離独立するという経過をたどった」とあります。ただ、「京都大学における経済学関連講座の設置は…京都帝国大学法科大学の時代にまで遡ることができる。…（法科大学の）開設は明治三二（一八九九）年九月一一日…法科大学に置かれることになった経済学関連の講座は、明治三二（一八九九）年七月三日付の勅令第三二一号によって、経済学二講座、財政学一講座、統計学一講座と定められた」ともあります。

従いまして、京都大学における経済学に関する教育研究の歴史は法科大学開設とともにあるのですが、京都大学経済学部は一九一九年に創設され、今から約七年後の二〇一九年に創立百周年を迎えることになります。創立百周年自体は一つの節目にすぎませんが、この機会に経済学部のこれまでとこれからについて思いを巡らせてみるのも意義深いことのように思われます。

この百年近くにわたる経済学部の歴史は、当然のことながら、日本経済や日本社会の歴史と無関係ではありません。経済学部創立時の日本経済は第一次世界大戦のブームに沸いておりましたが、一〇周年には日本も未曾有の大恐慌に襲われ、経済学部でも学部生の一割強が授業料を収めることができなかったと記されています。五〇周年は高度経済成長を経て〝日本経済の奇跡〟に世界的な注目が集まっている頃でありましたし、学園紛争の真最中でもありました。七〇周年はバブル経済の末期に迎えました。現在の日本経済は一種の長期停滞期にあるようです。それぞれの場面で京都大学経済学部の卒業生がさまざまな貢献をしていたことでしょう。さて、京都大学経済学部が百周年を迎える時の日本はいかなる状況でしょうか。皆様はどう思われますでしょうか。

近年、大学に対する期待が大きくなっていることの裏返しかもしれませんが、経済界、政府、メディアなどから大学に対して厳しい目が注がれているように思われてなりません。朝日新聞社の「教育」をテーマにした「全国世論調査」（二〇一一年一月一日付）によれば、大学教育の成果に関する社会の評価は厳しいものがあります。「日本の大学では、世界に通用する人材を育てることができていると思うか」という設問に対しては、「できている」という回答が二六％であるのに対して、「できていない」という回答が六三％にのぼりました。また、「日本の大学では、企業や社会が求める人材を育てることができていると思うか」という設問に対しては、「できている」という回答が二五％であるのに対して、「できていない」という回答が六四％に達しました。

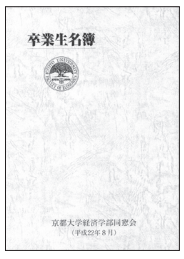
日本経済新聞には大学に関するページが特設されていますし、去る六月四日に開催された政府の国家戦略会議の第五回会議の第一議題は、「教育システム改革、グローバル人材育成の推進」でした。先頃、文部科学省が発表した大学改革実行プランの副題は、「社会の変革のエンジンとなる大学づくり」となっています。大学改革は、国家戦略上最も重要な領域の一つに位置付けられていると理解しています。激しく変化する社会における大学の機能の再構築が求められているのですが、グローバル化に対応した人材育成、大学教育の質的転換と大学入試改革、世界的な研究成果を生み出す研究力強化、などの課題が提起されています。

グローバルな志向・思考を持った人材を育成することは、今後の大学にとって中核的なミッションの一つになると思われ、経済学部としてもそのミッションを遂行するべく努力してまいりたいと考えております。そこでの難問の一つは、日本政府の大きな財政赤字のため国からの運営交付金が減り続ける、また教職員の定員削減という状況が今後とも続くと予想される中で、ミッションの遂行に取り組まなければならないということです。しかもこの改革はスピードを要求されているようです。

いずれも避けて通れない課題ですが、いわゆる教育・研究機関の改革は、国として一つの政策が提示され、それに沿って斉一的に行われるというようなものではもはやないようにも思われます。また、教育や研究などの分野では改革の効果が現れるには相当の時間がかかることにも留意しておかなければなりません。大学改革には長期を見通す眼力と改革を持続する力量が求められるように思われます。京都大学経済学部らしい改革を進めてまいりたいと考えております。

いつ頃のことでしたか、大学は象牙の塔だと批判されたこともあったと記憶しています。手元の辞書によれば、象牙の塔とは「芸術至上主義の人々が俗世間を離れて楽しむ静寂・孤高の境地。また、現実から逃避するような学者の生活や、大学の研究室などの閉鎖社会」とされています。大学はもはや閉鎖社会にはなり得ませんが、大学と社会との関係は今後ますます鋭く問われていくことでしょう。同窓生の皆様には社会の目を大学に注ぎ込んでもらうとともに、大学改革の担い手としても参加していただければ幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

卒業生名簿について



平成22年8月に京都大学経済学部・経済学研究科修士課程卒業生名簿を発行いたしました。この名簿は、同窓会年会費を納入していただきました会員様に無償で配布しております。
（※在庫が無くなり次第、配布終了とさせていただきますのでご了承ください）

◇

平成24年度　同窓会総会のご案内

平成24年度経済学部同窓会総会を下記の日時に開催いたしますので、ご出席賜りますようご案内申し上げます。
詳細につきましては、同封のご案内状をご参照ください。

記

日　時　　平成24年10月13日（土）14時30分～18時15分
場　所　　京都大学法経本館第5教室および
　　百周年時計台記念館2F国際交流ホール

◇

総会に関するアンケートのお願い

経済学部同窓会は、皆様より直接貴重なご意見を頂戴し、より満足度の高い総会にしていきたいと考えておりますので、
- 講演会に関するご意見・ご要望（講演者、テーマ、その他）
- 懇親会に関するご意見・ご要望（形式、催し物、料理、会費、その他）

を下記メールアドレスへご連絡いただくか、同封しました総会出欠ハガキの「通信欄」にご記載の上、ご返送をお願い申し上げます。

◇

会費納入のお願い

平成24年度（24年4月～25年3月）の同窓会年会費5,000円を同封の払込用紙（手数料無料）で納入くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

京都大学経済学部同窓会事務局
〒606-8501　京都市左京区吉田本町
TEL／FAX　075-753-3419
E-mailアドレス　dosokai@econ.kyoto-u.ac.jp
《京都大学経済学部同窓会ホームページURL》
http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~dosokai/D-index.html

なお、ご住所変更の折は、必ずお知らせいただきますよう、お願い申し上げます。

近況報告

乙訓、ときどき北海道

櫻田忠衛（平成二十三年退職）

近況

向日市の市長選挙に立候補するために京都大学を定年の二年前に辞めて、同窓会のみなさんには大変なご迷惑をおかけしてしまいました。選挙には落選して、これで自由になって好きなことができるのではと期待したのですが、そんなに甘くはありませんでした。

私の住む乙訓地域に六三〇〇人ほどを組織している医療生活協同組合があり小さな診療所を経営しているのですが、その理事長に担ぎ上げられてしまいました。友人は「良いところへ天下りしたな」と羨ましがるのですが、とんでもありません。この役は無報酬で、ボランティアです。そのうえ、経営責任が負わされてこの年になって思いもしなかった経営問題に携わることになり、自由に使えるはずだった時間はこの業務のためにほとんどがとられています。しかし、これも、高齢化が急速に進行する中で地域の人たちと力を合わせて、自分たちの手で健康で住みよいまちを作る住民運動の一環と考えて新たなことに挑戦しています。

また、同じ乙訓の地域で若い人が集まる社会科学の基礎を学ぶ学習会が組織されたのですが、その講師を要請されました。集まってきた人たちが勝手に「さくらだ塾」と名付けて月一回、二〇名くらいの人たちと学習しています。「頼まれると断れない」という私の悪癖がわざわいしてこれに応じることになったのですが、私にとっては楽しくて充実した時間になっています。大学を辞めて若い人たちとの接点がなくなってしまったのですが、地域の中で若い人たちと再びつながりを持つことができて、私がこれまでの人生の中で培ってきた知識と経験が生かせる場を見いだすことができました。三時間ほど学習と討論をしたあと、場所を居酒屋に移して議論を続けます。若い人たちに刺激を受ける至福の時です。

こうして結構忙しい毎日を送っているのですが、その間をぬって故郷である北海道を訪れています。時間があるときに行くなどと言っていると実現しないので、月の三分の一は北海道に住むと決めています。

娘が住んでいる岩見沢を拠点にして、北海道を観光するのではなく生活することにしています。北海道の風景も人も良いのですが、北海道へ行っていつも感じるのは空気と風が違うということです。私を生み、育ててくれた北海道の空気と風の中にいるだけで癒やされます。実は単に京都の忙しい日常から逃れたいだけなのかも知れませんが、これが今の私の活動源になっていることは確かです。

常務理事の一〇年

私は細川元雄先生の後任として常務理事を二〇〇〇年から二〇一〇年まで務めました。この一〇年間で特に印象的だったのは、昭和三二年卒業のみなさんから京都大学を会場にして卒業五〇周年記念同窓会を開催するので力を貸してほしいと要請され、実行委員のみなさんのお手伝いができたことでした。これ以降、卒業五〇周年記念同窓会は京都大学を会場にして行われるようになり、私は三二年卒業から三五年卒業までの四回の記念同窓会に協力することができました。経済学部が所蔵するインキュナブラ（グーテンベルク活版印刷機が発明されてからの五〇年間（一四五〇～一五〇〇年）に印刷された本）のトマス・アキュナス「神学大全」（一四八二年）をはじめ、デカルト「方法叙説」（一六三七年）、ホッブズ「リヴァイアサン」（一六五一年）、ルソー「社会契約論」（一七六二年）、スミス「国富論」（一七七六年）、マルクス「資本論」（一八六七年）などの古典初版本の展示や、最近、国の重要文化財に指定されることになった「清風荘」の見学などを企画して、参加された方々に少しは喜んでいただけたのではないかと自負しています。経済学の古典展示を見た方が、これを学生時代に見ていたら経済学への関心ももう少し持てたかも知れないとおっしゃっていたのが印象的でした。

卒業生だより

入学からの二十四年を振り返って

四辻充生（平成五年卒）

私は平成五年に経済学部を卒業しました。在校時参加させていただいたゼミの植田先生へ、学部長ご就任のお祝いの連絡を差し上げたところ、卒業生だよりへの寄稿のお話をいただきました。これまでの人生振り返りのよい機会と思い、寄稿させていただきました。

入学は平成元年。（今税率アップが話題となっている消費税が導入された年です。）中高一貫校を卒業して、新しい仲間と生活が始まることに、期待と不安な気持ちで入学したことを覚えております。幸いにも、クラス、ゼミ、クラブ活動での仲間に恵まれ、クラブで所属した将棋部は、今でも東京での大会に一緒に参加しています。本分の学業は恥ずかしながらそれほど熱心とはいえませんでしたが、植田ゼミでは琵琶湖浄化の経済的価値を調査したり、工学部院生の先輩と講師を招いて講演会を開催したりと、私なりに充実した大学生活でした。

大学卒業後は通信会社に就職し、神戸で三年、東京で十六年勤務しました。入社当時は、電話積滞が終わり、競争原理を導入され、料金競争と電話の個人化へと向かっていました。（当時、携帯電話は少なく、ポケットベル時代でした。）会社では、営業からネット企業の起業など幅広い業務を経験しました。現在はクラウドサービスを扱う部門で、事業計画等の企画業務を担当しています。この後、六十歳まで働くとすると、現在ちょうど中間地点です。これまでの二十年の変化は、あまり予測できなかったのですが、これからの二十年はこれまでの経験を生かし、少しでも先回りして、世の中の役に立つと感じられる仕事にしていきたいと意を新たにしています。

最後に、大学時代において自分なりに力をいれた議論について、感じることを述べたいと思います。原発事故による原発再稼働や食料安全基準をめぐる議論や普段の会社生活など、様々な場面で感じるのですが、最後の意志決定・結論が納得感が得にくいと感じませんでしょうか。私なりの分析をしますと、議論によって、懸念や問題点の表明は百出するものの、論点が問題そのものにはまりこんでしまっていて、解決案に対する議論ができていないのではないかと思います。この感じは、ゼミで議論をしているうちに、何を論点に議論しているのかわからなくなる状況とよく似ています。ゼミで先生にやっていただいたように、論点の適正化（解決策の提案提示）をした上で、意志決定をするよう、改めて心がけたいと思います。

最後になりましたが、京大経済学部並びに卒業生の皆様の益々のご発展を祈念し、私の卒業生だよりとさせて頂きます。

『父』

片岡英彦（平成六年卒）

昨年三月の東北大震災から半年経った昨年九月、私は勤務していた企業を退社し、フランスのパリに本部を持つ国際NGO「世界の医療団」の広報職員となりました。「世界の医療団」は「国境なき医師団」と創立者が同じ団体で、長期の医療支援を主な活動内容としています。現在でも被災地に精神科医らを派遣し、被災者の方々のメンタルケアなどにあたっています。

私は平成六年に経済学部を卒業し、東京のテレビ局に就職しました。「京大を卒業したのに、何で放送局なんかに入るんだ？」と父は不満でした。そのテレビ局は、当時、視聴率ナンバーワンでした。八年後、私は、クリエーターなど、一部の「マニア」が利用すると思われていた外資系パソコンメーカーに転職しました。「マスコミュニケーション」よりも「インターネット」を使ったコミュニケーションに関心を持ったからです。「外資系企業なんかやめとけ」と、父は反対しました。このパソコンメーカーは、現在、世界有数のデジタル企業として、音楽デバイスやスマートフォンを世界中に供給しています。その後、私はハンバーガーチェーン

店に転職し、マーケティングPR部長を四年間務めました。全国の「店舗」を「メディア」としてどう活用できるか挑戦しました。店舗で研修中の写真を父に見せると「アルバイトなのか？」と言われました。このハンバーガーチェーンは、デフレ時代の「勝ち組」と呼ばれるようになりました。

まだtwitterやFacebookがあまり知られてはいなかった平成二十一年、私は国内最大ユーザー数を誇るSNS（ソーシャルネットワーク）企業の広報宣伝部門の責任者になりました。長年、製造業に従事した父は「モノを作らない企業は信用できない」と言いました。モノを作らない「SNS」の、その「ネットワーク」が、今、世界を変えようとしています。

昨年の震災で、大きな時代の節目を感じ、私はNGOの職員となりましたが、この業界の待遇や労務環境はまだ未発達です。家族のために個人事務所を設立し、個人事業主として、現在、NGOの活動と並行し、企業のマーケティング活動を支援して家計を補っています。「これからは、間違いなくNPO（NGO）や、個人が世界を動かす時代になる」と父に言いました。父は私の言葉を初めて否定しませんでした。

いつしか、私自身が二人の男の子を育てる「父」になっていました。個人やNPOによるネットワークの力が、大企業や政府の組織力と肩を並べるには、まだ、十年か十五年はかかるのでしょう。人間は歳をとります。その頃、私も五十五歳くらいになります。すでに時間との戦いです。息子たちの時代には、今より少しでも日本が良くなるよう、二十代、三十代の若い後輩の皆さんの奮起を、一人の「父」として願っています。（＊このドラマはフィクションです。実在する私の父とは関係のない「父」の物語です。）

社会人十年を経て思う「大学のありがたみ」

丹田佳秀（平成十四年卒）

左手前が丹田佳秀さん

社会人として丸十年が経ちました。思い起こせば在学中は体育会アイスホッケー部員として連日の昼夜逆転生活。大学に行くことすら億劫に思う毎日で、当時の私はほとんど大学に顔を出さないダメ学生だったのですが、二回生から籍を置いた宇仁ゼミだけは皆勤賞だったと記憶しています。

当時の（今もかもしれませんが）宇仁ゼミはとにかく自由でした。教授はその人間的な懐の深さと、トレードマークの笑顔でいつも暖かくゼミ生たちを見守ってくれました。教授が生み出す自由な雰囲気のおかげで、学生同士がざっくばらんに意見を交わすことができましたし、時に突拍子もないアイデアや発想が生まれたりもしました。

今振り返ると宇仁ゼミでの経験があったからこそ、社会人としての「今の自分」が存在しているような気がしてなりません。

卒業後、在阪テレビ局で報道記者を五年、スポーツ担当として野球やサッカーの中継、スポーツ番組の制作を五年経験。この春からはバラエティ番組の制作担当に異動しました。

記者時代は夜討ちだ、朝駆けだと事件取材に駆けずり回り、スポーツ時代には連夜の球場通いで「ビール片手に野球観戦」というオッサンの醍醐味をすっかり忘れてしまいました。そして、この春に異動したばかりのバラエティ職場では、中堅と呼ばれる年次になりながらも、新人と同じペーペー生活に逆戻り。部内いたる所で飛び交うお笑い芸人の名前や持ちネタを必死で覚える毎日です。

報道・スポーツ・バラエティとジャンルは全く異なるマスコミの制作現場を経験してきて、毎回、それぞれの仕事の違いや部独特の習慣・雰囲気の違いに頭を悩ますことが多いのですが、宇仁ゼミのおかげで、唯一とまどわずに十年間やってこられたことがあります。

それは「番組の企画会議」。

これがどの部署の会議でも、なんとも当時のゼミの雰囲気にそっくりなのです。

テレビ局の企画会議というのは他にないオリジナルなアイデアを探っていくため、あーでもないこーでもないと、本当に全員が勝手気ままに話していきます。遠慮していては、発言すらできません。私もあのゼミの経験がなければトークの空中戦に入り込めず、地蔵のように固まっていたことでしょう。想像するだけで恐ろしいことです。

社会人十年を経て気付いた、学生生活のありがたさ。

「パラダイス経済」に感謝し、未来永劫、自由奔放な京都大学、そして経済学部であって欲しいと願っています。

多国籍企業こぼれ話

廣野淳平（平成十九年卒）

平成十九年に経済学部を卒業し社会人六年目を迎えました。在学時代は京都大学交響楽団でフルートに打ち込んだのち、その頃設立されたばかりであった末松千尋ゼミにお世話になりました。ゼミ生の大半が理系の大学院生であり、自分でプロジェクトを主導する形態のゼミにおいて、ゼロベースでの論理思考を大いに鍛えられたことを覚えています。経営学のゼミの人気が高まってきた頃でもあり、多くの後輩に恵まれたのも良い思い出です。この頃培った能力は社会人になってから大いに助けになっております。

卒業後、日本マイクロソフトに入社し、現在はサーバー・クラウドビジネスの財務担当として日々如何に売上を伸ばすか頭を悩ます日々を送っております。弊社はウィンドウズとオフィスの会社というイメージが強いですが、サーバー製品群でも同規模の売上を上げており、日本の様々なITインフラを日々支えております。また、クラウドビジネスは今後数年間、年間三〇から四〇％の成長を続けると言われており、IT資産を所有することから利用する方向への転換が進んでいます。本年度、弊社の教育機関向けのクラウドメール、オフィスサービスであるLive@eduの採用を御決定頂き、母校の皆様のお役に立てたことを嬉しく思っていた所でございました。

多国籍IT企業の中でのこぼれ話を幾つかご紹介させて下さい。まずは、働く必要がないほどの財力を得ながらも、会社のビジョンの実現のために猛烈に仕事をする経営陣の姿です。一日中会議と決断をこなし、わずかな隙間時間にメールをチェックし、時差を超越して働くタフな姿が入社してからの最初の驚きでした。また、教科書の中のものであったバランスドスコアカードによる評価が徹底されているのも驚きでした。各国トップや部門長全ての成績が毎週毎月レビューされ、結果が出ない場合は厳しい修正プランの提出と実行が求められます。人種、文化が違う人間が混在する中で、明確な目標を掲げ、誰から見ても同じように見える客観的な指標で結果を測る姿勢にグローバル経営の凄みを感じています。最近痛感することは、外資系であれ日系であれ商売を行うのは日本であり、グローバルレベルでの方針を理解しながらも、日本のお客様に響くビジネスをしていくことが重要だということです。漠然と海外で働きたいと考えて入社した私でしたが、自分が日本人であることは変えられない大きなピースであることを痛感しております。

ここまでのご精読を感謝すると共に、皆様の刺激に少しでもなれば幸いです。最後にはなりましたが、関東の卒業生の皆様と是非交流できればと考えております。jhirono@microsoft.comまでお気軽にご連絡下されば幸甚に存じます。

私の研究

京都大学経済学研究科　教授　久本憲夫

私の研究分野は、広く言えば社会政策研究ですし、やや特定化すれば、雇用関係あるいは雇用システムの研究です。最初は、ドイツの労使関係について研究していたのですが、徐々に日本の労使関係、より一般的には雇用関係の研究に進んできました。

現代では、多くの人々が雇用関係の下で生計を維持しています。安定した雇用関係にある人は安んじて仕事に励むことができますが、それでも会社が傾いたときには「退職勧奨」や「希望退職」の募集、さらには解雇などで雇用の場を失うことがしばしばあります。それは経営者や管理職でも同じです。次の就職先がすぐに決まったり、十分な資産を持っていたりすれば良いのですが、いつもそううまくいくとは限りません。とくに中高年、最近では若者でもそう簡単にはいきません。

最近では、正社員と非正社員の格差の問題、今や多数派を占める大卒の就職問題なども研究の対象に入ってきます。現在の第一の研究領域です。「正社員」という言葉は、一九八〇年代から、「非正社員」という言葉は二〇〇〇年代に入ってから一般化した新しい言葉です。前者は研究者の間では一九七〇年代か

ら使われるようになりました。オイルショック後の「減量経営」の一方で、パートタイマーなどが増えてきたことが、その背景にあります。公的な統計がとられるようになったのは、一九八〇年代のことです。

そもそも「正社員」とは何かという点は、「正社員・非正社員」という言葉が世間に跋扈しているにもかかわらず、実にあいまいなままです。多くの統計では「正社員・正規の職員とみなされる人」が「正社員」という、学問的には定義になっていないけれども、これしかないという感じで調べられています。正社員概念については、かつて考察したことがあるので、関心のある方は読んでください。便利なもので、今ではインターネット上に公開されています（「正社員の意味と起源」、『季刊　政策・経営研究』（三菱UFJリサーチ&コンサルティング）二〇一〇年四月、vol. 2, http://www.murc.jp/report/quarterly/201002/19.pdf）。

社会科学者の悩みでもあり醍醐味でもあるのですが、社会は新しい言葉を日々生み出します。それに概念規定をしないと社会科学を分析することが困難となります。しかし、それらの言葉はしばしば多義的であり、あまり狭く概念規定すると現実と遊離しがちになります。「正社員」という言葉もそれにあてはまります。「ホワイトカラー」という言葉も単なる「白襟」なのですが、「ワイシャツを着た労働者」と定義をするわけにはいきません。

個人的には、正社員の多様化については、九年ほど前から発言しています（『正社員ルネサンス――多様な雇用から多様な正社員へ――』中公新書）が当時はあまり注目されませんでした。社会問題を解決するための学問的な基盤を考えることが研究者の使命の一部だと考えると、最近、正社員問題の解決策として「正社員の多様化」の必要性が徐々にではあれ注目されてきたことは喜ばしいことです。

第二の研究領域は、狭い意味での日本の労使関係です。日本では大企業を中心とした協調的労使関係を維持してきましたが、「選択と集中」のなかで、企業部門の分割・売却などを進めています。これは企業別組合に変化を強いてきました（少し古いですが、『企業が割れる！　電機産業に何がおこったか――事業再編と労使関係』、日本評論社、二〇〇五年）。また、希望退職の一般化は雇用保障の内実をかなり変化させました。また、非正規雇用の増加や雇用状況の悪化は、いろいろな問題も引き起こしています。個別労使紛争では「いじめ・嫌がらせ」が増えていますが、こうした個別労使紛争処理の課題についても研究したいと思っています（「個別労働紛争における労働組合の役割」、『日本労働研究雑誌』No. 613、二〇一一年）。

第三の研究領域はドイツの労使関係です。とくに雇用調整の仕組みについては昔から強い関心があります。雇用調整というのは、どの企業も表にだしたくないものですから、なかなか実相に迫ることができません。この研究は、忙しくてしばらく停止していますが、近いうちに再開したいと思っています。

労働市場をどのように理論的に把握するかも、見果てぬ夢かもしれませんが、研究領域の一つです。第四の研究領域です。労働力取引の場である労働市場というのは複雑な形をしています。法的に見れば「労働法」という分野があることからもわかるように、労働市場は、特別の市場であり、人々の観点からみれば、まさに生きるため、生計を立てるための基本的な場です。雇用の場がなければ、自立的な生活はままなりません。失業したら起業すればよいとも気楽にはいえません。労働供給に見合った労働需要があるとは限りませんし、例外的に低失業社会であった日本も、普通の先進国の仲間入りということで、徐々に失業率も上がってきています。その都度の対策も必要ですが、理論的検討をしたいものです。

さて、最近は数冊の本を出版しました（多くは編者）。『社会政策（Ⅰ）・（Ⅱ）』（法律文化社、二〇〇八年）、『日本的雇用システム』（ナカニシヤ出版、二〇〇八年）、『労使コミュニケーション』（ミネルヴァ書房、二〇〇九年）、『日本の社会政策』（ナカニシヤ出版、二〇一〇年）です。教科書的なものと研究書ですが、自分の考えをまとめるのに役立ちました。本を出版したあとの二年間は、学部執行部や学会の代表幹事などが忙しく、落ち着いて研究ができませんでした。この二つから、今月ようやく解放されたので、これからは研究が再開できると喜んでいます。

出版案内

『イギリス航空機産業と「帝国の終焉」―軍事産業基盤と英米生産連携―』

（有斐閣、二〇一〇年）

京都大学大学院経済学研究科　准教授
坂出　健

私は、一昨年末、『イギリス航空機産業と「帝国の終焉」―軍事産業基盤と英米生産連携―』と題する著書を刊行しました。

本書は、第二次大戦中葉から一九七〇年代初頭にかけての約三〇年間におけるイギリス航空機産業のアメリカ航空機産業との競争・挫折・協調という史的展開の分析を通じて、パクス・アメリカーナからパクス・アメリカーナへの転換の特質を探求した産業史研究の研究書です。また、本書は、「二十世紀的世界」をどのようにとらえるかという問題関心に基づき、戦争・覇権の軍事産業基盤である航空機産業の研究を通じて、「二十世紀的世界」の大きな転換点のひとつであるイギリス帝国の終焉の特質を把握しようとする試みでもあります。

イギリス航空産業の上記の三〇年の展開を、三部に分けました。第一部（「帝国再建期」：一九四三～五六年）は、第二次大戦中に策定されたブラバゾン計画に基づいて、戦後の商業航空機市場における対米競争力の保持に努めた時期です。しかし、そこにはアメリカの相互軍事援助への依存という脆弱性が宿っていた（第一章）。続いて、朝鮮戦争を契機とした軍民のジェット化を背景にボーイング社・ダグラス社というアメリカ航空機産業の市場支配力が強まった。その結果、イギリスの機体部門の弱体化とイギリスのエンジン部門の競争力維持という跛行的状況が生まれ、ボーイング707に英ロウルズ・ロイス社エンジンが搭載されるというアメリカ機体部門とイギリス・エンジン部門間の生産提携が始まった。

イギリス航空機産業の困難は、一九五六年のスエズ危機と一九五七年のスプートニク・ショックによって新たな段階に到達する。第二部（「スエズ危機後の帝国再編策」：一九五七～六五年）は、その打開案としてイギリス政府が、航空機産業合理化政策を打ち出した時期です。しかし、フライ・ブリティッシュ政策（イギリス機運航政策）による拘束から一九六四年に経営危機に陥ったイギリス国営航空会社BOACが経営改善策として次世代長距離機としてボーイング747を採用することによって、フライ・ブリティッシュ政策が終焉し、軍事部門でも、開発費用高騰から主力軍用機TSR-2を開発中止し、代替機としてアメリカ機を採用することによって、軍用機・民間機ともに、イギリス独自での軍事産業基盤確保策は挫折を迎えた。

独自の軍事産業基盤確保をしえなくなったイギリスは、航空機の国際共同開発を進めたが、その相手先として、アメリカか大陸ヨーロッパかの選択が迫られた。第三部（「帝国からの撤退期」：一九六六～七一年）は、まず、軍用機開発において主要プロジェクトであった英仏可変翼機の共同開発の挫折と英独伊共同開発トルネートへの帰着の過程を検討した。次に、民間機におけるワイドボディ（二通路）機開発をめぐる合従連衡の中で、イギリスが欧州エアバスからの撤退と、米ロッキード社トライスターへのロウルズ・ロイス社エンジン搭載という米英機体-エンジン間生産提携が成立した過程を検討した。また、最終章では、一九七〇年代初頭のロウルズ・ロイス社の経営危機がアメリカの国家財政の保証により再建され、米英機体-エンジン間生産提携がアメリカの国家権力・覇権に依存していることを検証した。

本書の特色は、いわゆるイギリス衰退論に反対する反衰退論の立場から戦後イギリス産業の衰退と再活性化を論じた点にある。またその再活性化の道筋は、通説である「帝国からヨーロッパへ」（オーウェンら）ではなく、帝国喪失後も英米特殊関係を重視し、アメリカが主導するグローバル市場へサプライヤー（特にエンジン供給者）として参画する道を通じてであったことを主張している。

今後、私は、（一）一九七〇年代以降現代にいたる航空機・航空宇宙産業の展開、（二）航空機産業と並んで軍事産業基盤として重要な役割を担う原子力産業の検討、（三）軍事産業基盤（航空機・原子力産業）の検証を通じ、国際政治上の枠組みである核不拡散レジームがどのような特質をもつか、研究を進めたい。

退任教員の紹介

平成二十四年三月三十一日　退職

大学院経済学研究科教授

今久保幸生

一九七九年三月　京都大学経済学研究科博士課程
一九九四年三月　京都大学博士（経済学）
一九九四年四月　京都大学経済学部教授
一九九七年四月　京都大学大学院経済学研究科教授
主要著書『19世紀末ドイツの工場』有斐閣、一九九五年

平成二十四年三月三十一日　退職

大学院経済学研究科教授

大西　広

一九八九年三月　京都大学経済学研究科博士課程
一九九一年一月　京都大学経済学研究科博士
一九九八年一月　京都大学大学院経済学研究科教授
主要著書『マルクス経済学』慶應義塾大学出版会、二〇一二年

平成二十四年三月三十一日　退職

大学院経済学研究科教授

吉田和男

一九七一年～一九八五年　大蔵省勤務
一九八七年　十一月　京都大学経済学研究科博士
一九八八年　八月　京都大学経済学部教授
一九九七年　四月　京都大学大学院経済学研究科教授
二〇〇六年　四月　京都大学経営管理大学院長（二〇〇八年三月まで）
主要著書『日本経済論―数理財政学序説』京都大学学術出版会、一九九五年

新任教員の紹介

経済学研究科・経済学部講師

北田　雅

就任年月日
平成二十三年九月一日

担当講義科目
学部／経済英語

出生地・生年月日
京都府京都市
一九六七年九月十六日

感想・抱負等

商社勤務経験後、本学医学研究科に教授秘書として従事。二〇〇〇年より西村周三教授の下、自治体病院経営の実証分析研究を行い、経済学修士取得。その後Boston University School of Public Healthに留学、二〇〇五年より本学医学部附属病院総合臨床教育・研修センターにて新医師臨床研修制度施行の影響に関する研究に従事しました。同センターにて面談業務を担当したこともあり、研究に臨床心理学的アプローチを取り入れました。その後、東北大学経済学研究科にて、産学連携による実践型人材育成事業や、研究戦略の企画・編成・支援業務等を扱いました。現在、研究としましては医療従事者に関する医療心理学や、それに関わる医療経済学を取り扱っております。当研究科における実務としましては、大型競争的研究資金獲得に関する企画・支援業務や、歴史ある京都大学経済学会の運営を担当させていただく等、研究科長の補佐的業務を仰せつかっております。これまでの豊富な実務経験を生かし、研究科のお役に立つことができますよう精進致してまいります。どうぞご指導・ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

各支部からの便り

東京支部

【年二回の支部総会開催】

昨年九月十七日、東日本大震災により延期された第二十一回支部総会が開催され、西澤同窓会会長から和田紀夫支部長（S三十九年卒）に引き継がれた。（この経緯は前回号にて詳細記載）講師はS四十三年卒の猪木武徳氏（国際日本文化センター所長）で、支部総会は盛況璃に閉会した。この支部だよりでは支部総会の報告を二回することになるが、今年三月十七日第二十二回の支部総会を学士会館で開催した。NTT会長の和田支部長は前日ロシアから帰国したため、挨拶ではホットなロシア大統領選挙の話が有り興味深いものであった。来賓の田中理事長は支部総会の日程を最優先にされ、理事長として最後のご挨拶を東京支部の皆さんにして頂いた。京都から八名の先生が参加された。講師は高坂正堯ゼミ生で前原誠司氏と同世代の論客で知られる法学部教授・中西寛氏で「大転換期の国際政治をどう考えるか」と言う演題でご講演頂いた。西澤会長の乾杯で始まった懇親会は琵琶湖周航歌と学歌で締めくくられた。（写真）なお、東京支部の事務局長を八年間担当して頂いた合田隆年氏（S三十五年卒）が三月末で退任されるので、永年のご尽力に対し、田中理事長から本部として記念品の「金時計」を贈呈された旨、ご報告が有り、支部としても銀製の「写真立て」を贈呈した。

和田支部長　支部総会挨拶（学士会館）

田中理事長、西澤会長　懇親会乾杯の挨拶

【経済懇話会】

昨年十月二十九日第三十二回経済懇話会が京大東京オフィスにて開催された。講師は諸富徹教授で「再生可能エネルギー固定価格買い取り制度と電力システム改革」について講演頂いた。本年一月十四日第三十三回経済懇話会が開催された。今回の講師は「年一回は経済学部卒業生を講師に」という新企画でお願いすることになった、国立社会

琵琶湖周航歌と学歌を全員で

保障・人口問題研究所所長の西村周三氏であった。演題が「社会保障と経済成長―人口減少と経済見通し」と言う事もあり、関心が高く参加者は過去最高の百四十名となった。

京大東京オフィスにて第三十二回経済懇話会　諸富徹教授

【後援シンポジウム：東アジア経済研究センター】

経済学研究科付属の同センターが初めて東京にてシンポジウムを開催するに当たり、東京支部も後援することにした。第一回は昨年七月二十三日京大東京オフィスにて「中国自動車市場ボリュームゾーンを探る」を開催。参加者百名のうち支部会員三十名が参加。この分野に興味を持っておられる若手支部会員もおられ今後この種のシンポジウムに後援したいと考えている。

今後の支部の主な行事日程は十月二十七日（土）第三十五回経済懇話会、来年一月十九日（土）第三十六回経済懇話会、三月十六日（土）第二十三回支部総会であります。ふるってご参加ください。さて、合田先輩から事務局長を引き継ぎました宇野輝（S四十一年卒）が今回の支部だよりをお届けしました。本部の常務理事の仕事も含めまして皆様のご支援賜りますようお願いいたします。

宇野　輝（昭和四十一年卒）

京大東京オフィスにて後援シンポジウム
東アジア経済研究センター　劉徳強センター長

近畿支部

平成二十三年十二月十六日（金）、近畿支部としては初となる総会が、大阪ガス本社ガスビル3階ホールにて、九十二名の出席のもと、開催されました。

当日は、ご来賓の先生方のご紹介に続き、出田善蔵近畿支部長、同窓会本部・理事長の田中秀夫経済学部長からご挨拶、そして、同・常務理事の江上雅彦教授から同窓会の活動状況について、ご報告をいただきました。その後の講演会では、京都大学経済学研究科経済学部の西牟田祐二教授から、「賠償問題をめぐる歴史的事例」というテーマでご講演をいただきました。

総会終了後、ガスビル食堂にて、七十七名の出席のもとに、懇親会が開催されました。野尻賢二副支部長のご挨拶に引き続き、京都大学の象徴である時計台を描いたケーキに、出田支部長、本山美彦顧問、大川雅司副支部長の前大阪・神戸・京都の各支部長がろうそくに火をともした後、田中学部長がその真ん中のひときわ大きなろうそくに火をともし、近畿支部の発足を皆で喜び合いました。そして、辻井昭雄顧問の乾杯のご発声を皮切りに、年齢や職種を越えて同窓生間で活発な交流が行われました。その後、余興として、アコーディオン奏者の藤原祥衣さんをお迎えし、藤原さんの伴奏のもと、参加者全員で「新生の息吹」「琵琶湖周航の歌」を合唱し、会場の盛り上がりが最高潮となったところで、麻生純副支部長から中締めのご挨拶の後、参加者全員で記念撮影を行い、大盛況のうちに幕を閉じました。

近畿支部では、今回のホームページの開設をはじめ、今後、若年・中堅層に対するはたらきかけを通じて、会員数の更なる増加と若い会員の参加増を図り、支部の活性化に努めていきます。

《近畿支部HPのご案内》

近畿支部の発足を機に、ホームページを開設します。卒業生同士、あるいは卒業生と学生との交流の場としてどうぞご活用ください。ご訪問をお待ちしています。

http://kyoto-u-econ-reunion-kinki.com/

※近畿支部 連絡先

・大阪ガス㈱秘書部気付
〒五四一―〇〇四六
大阪市中央区平野町四丁目一番二号
・電話番号
〇六―六二〇五―四五〇一
・FAX番号
〇六―六二〇五―七二七五
・メールアドレス
zenzo-ideta@osakagas.co.jp
出田善蔵（昭和四十五年卒）

近畿支部総会

近畿支部総会集合写真

田中学部長と、本山、大川、出田の
旧三支部長によるケーキ点灯式

酔いざましの破顔高吟風景（声は揃っておりました）

卒業年次毎のテーブルで、まずは腹ごしらえ

九州北部支部

一．会員数

二〇〇名程度
地元企業・地方自治体等への就職者を中心に、東京・大阪に本社を置く企業の九州北部地区勤務者等により構成。

二．役員氏名

支部長：鎌田　迪貞（昭和三十三年卒　九州電力㈱相談役）
理　事：黒瀬　和男（昭和三十年卒）
理　事：橋本　剛（昭和四十三年卒）
理　事：藤永　憲一（昭和四十八年卒　九州電力㈱取締役常務執行役員）
理　事：薬真寺偉臣（昭和五十一年卒　九州電力㈱執行役員）
理　事：花田　恭一（昭和五十三年卒　㈱福岡スポーツセンター　代表取締役社長）

三．活動状況

〔総会・懇親会〕

・例年五月に年一回の総会・懇親会を開催。今年度は、定例の第三水曜日に開催し、二〇名が参加した。〔五月十六日（水）、於ホテルニューオータニ博多〕

・総会では、藤永理事からの挨拶の後、ゲスト参加いただいた、九州ご出身の遊喜一洋准教授から、大学ならびに経済学部・経営管理大学院の近況などをご紹介いただいた。

・その後、恒例となっている参加者全員による自己紹介を行った。一年ぶりの再会となったメンバーは、学生時代や京都での思い出のほか、最近取り組んでいる仕事のことなど近況を報告した。各々が思いのたけをぶつけた結果、例年にない盛り上がりをみせ、世代を超えて懇親を深めることができた。

・近年の参加者数はほぼ一定の水準を保っているが、毎年、

数名の若年層が新たに参加している。九州新幹線の全線開業に伴い、同窓生が一同に会しやすい環境に近づいていると考えられるため、引き続き、本総会以外の懇親会の開催等を通じ、同窓生の掘り起こしおよび総会・懇親会への新規参加者増に努めたい。

九州北部支部総会

四．その他

・今後も、同窓会本部と連携を図り、同窓会の発展に努めたい。同窓生の皆さまには、九州へ就職、赴任、転居等の機会がありましたら、是非ご連絡をお願いします。

※九州北部支部 連絡先

・九州電力㈱　お客さま本部
・〒八一〇−八七二〇
　福岡市中央区渡辺通二丁目一番八二号
・TEL
　〇九二−七六一−三〇三一
・メールアドレス
　Keisuke_Shimozuru@kyuden.co.jp
　下水流圭祐（平成十三年卒）

九州南部支部

第十六回九州南部支部同窓会総会は、平成二十四年七月二十八日（土）に熊本県熊本市内の熊本全日空ホテルニュースカイで開催された。当日の総会出席者は十七名であった。

九州南部支部総会

一．総会

総会では、瀬地山敏支部長による挨拶の後、支部運営に関する事項の確認並びに報告が行なわれた。引き続き、同窓会事務局本部からお迎えした経済学研究科・経営管理大学院教授の末松千尋氏から、学部や研究科の近況などについてご紹介いただいた。

▽役員（理事・幹事）について

平成二十四年度の役員は次のとおり。

支部長：瀬地山　敏氏（昭和三十五年卒　鹿児島国際大学　学長）

理事：熊本県理事　林田素行氏（昭和四十四年卒、林田公認会計士事務所所長）、宮崎県理事　岡野　徹氏（昭和三十八年卒、旭有機材工業㈱相談役）、鹿児島県理事　丸元貞夫氏（昭和三十八年卒、阪東機工㈱代表取締役会長）

会計監事：菊地裕幸氏（平成七年卒、鹿児島国際大学経済学部准教授）

二．講話

熊本学園大学経済学部教授（経済学博士）の酒井重喜氏（昭和四十六年卒）より、「近世イギリス財政史―財政封建制について―」と題して、約一時間ご講話をいただいた。酒井氏は『混合王政と租税国家―近代イギリス財政史研究』、『チャールズ一世の船舶税』という二冊の著書をもとに、中世イギリスにおける国王と諸侯の双務的契約である混合王政（封建制）が近代租税国家へと転換していく過程や原因などを詳細に論じられた。もともと使途が非経常費（軍事費）に限定されていた租税が恒久税として経常費にも拡大していくことで、混合王政は必然的に租税国家（制限王政）へと転化せざるを得ないという歴史的な過程を鮮やかに、かつ平易な語り口で説明され、一同も熱心に聞き入り、講話終了後には多くの質疑応答がなされた。

三．懇親会

懇親会は、海江田順三郎氏（昭和二十八年卒　高島屋開発㈱相談役）の乾杯により開宴。出席者それぞれの近況報告、学生時代の思い出話、今後の展望などについて、酒盃を交わしながら歓談が行われた。また今回は、以前支部に所属されその後転出された方など支部外からの参加も多く、地域の枠を越えて会員相互が打ち解ける交流の場となった。同窓会を機縁とした結びつきが着実に広がっていることを実感できた会であった。

※九州南部支部 連絡先

・鹿児島国際大学経済学部（富澤研究室）
・〒八九一−〇一九七
　鹿児島市坂之上八−三十四−一
・TEL　〇九九−二六三−〇七一七
・FAX　〇九九−二六一−三六〇六
・メールアドレス
　tomizawa@eco.iuk.ac.jp
　富澤拓志（平成二年卒）

在学生イベント！2012

同窓会では、平成二十一年度より学部学生の皆さんにも同窓会の「学生特別会員」として同窓会活動に携わって頂き、在学中から諸先輩方との交流を深め、同窓会活動内容を知っていただく機会を設けております。その一環として、実業界で活躍中の卒業生による講演会、および懇親会を毎年実施しております。今年度は、七月六日（金）に開催いたしました。あいにくの荒天でしたが大勢の在学生と教員あわせて約一〇〇名の参加がありました。

㈱フジテレビジョン矢延隆生さんの講演会

講演会では、㈱フジテレビジョンの矢延隆生さん（昭和六十三年卒）を講師としてお招きし、『たかがテレビ、されどテレビ！非常識な常識人！』という演題で、放送業の社会的な役割、そこで働く人材のあり方について講演をして頂きました。現在は人事部長として活躍されている矢延さんですが、以前は、スポーツ局でプロ野球、F1グランプリ、競馬、北京オリンピックなどの番組制作を担当されており、その幅広いご経験から貴重なお話を伺うことができました。講演後に質問コーナーも設けておりましたが、それでも質問が尽きず、続く立食パーティでも矢延さんを囲んで大勢の人の輪ができていました。

立食パーティでは、同窓会学内企画委員長の宇仁宏幸先生のご挨拶・乾杯のあと、出席していただいた先生方も含めて、和やかに歓談が進みました。その後のゲーム大会では、まず初めに『〇×クイズ』をしました。実行スタッフ全員で考えた難問・奇問を終始みなさん笑顔で、時には真剣に解く姿を拝見することができました。続く『名前ビンゴ』では、ゲストである矢延さんのお名前の文字がすべて揃い、見事初ビンゴとなられ、そこで盛り上がりは最高潮に達しました。その後、全員で記念撮影をし、盛況のうちに閉会となりました。

立食パーティ会場にて、矢延さんを囲んで歓談

このようなOB、教員、在学生が一堂に会する機会を通じて、若い世代の皆さんが経済学部や同窓会に親しみや愛着を持たれ、将来の同窓会活動を支えていってくださる根源となることを心より願っております。最後になりましたが、有志学生スタッフとして準備や当日の運営に奔走してくださった大嶋仁人さん、梶本眞子さん、佐伯直樹さん、西村直記さん、松本拓磨さんに厚くお礼を申し上げます。

（同窓会事務局）

集合写真

卒業五十周年記念 同窓会開催のお知らせ

経済学部を卒業されて五十年の節目の年には、各学年の有志の方が幹事、世話人としてご尽力いただき、毎年記念同窓会が開催されています。現在、昭和三十七年、三十八年卒業生の記念同窓会が企画されておりますので、該当される卒業生の皆様は、この機会に是非ご参加ください。

《卒業五十周年記念同窓会》
昭和三十七年卒業の皆様へ

＊日時：平成二十四年十一月十二日（月）午後一時三〇分～三時三〇分
＊会場：京都大学百周年時計台記念館二階　国際交流ホールⅡ・Ⅲ
＊次第：学部長の挨拶、乾杯、着席フランス風ビュッフェ、写真撮影など
＊会費：一万円（当日受付にて申し受けます）

まだお申し込みでない方で参加を希望される方は、ご案内時に同封いたしました「出欠ハガキ」にてお申し込みください。準備の都合上、十月二十五日を締め切りとさせて頂きます。万一、ご案内状が届いていない場合は、恐れ入りますが同窓会事務局（〇七五）七五三―三四一九までお問い合わせください。

世話人
坂本和一（E1）小泉容造（E2）
本田泰造（E3）橋本勝好（E4）

《卒業五十周年記念同窓会》
昭和三十八年卒業の皆様へ

来年私達も卒業五十周年を迎えます。これを機会に大学に集まり
◇青春の息吹を思い起こし
◇友人との旧交を暖め
◇更なる加齢に向けてのエネルギーにしましょう。

＊日時：平成二十五年五月二十三日（木）午後一時三〇分～四時三〇分
＊会場：京都大学百周年時計台記念館二階　国際交流ホールⅠ・Ⅱ

大学での合同懇親会と共にクラス単位の懇親会も検討されています。会の次第、会費につきましては、決まり次第ご案内いたします。

世話人会
E1　高月晋太郎、沖野一晃
E2　井上章、田中隆夫
E3　梶野亮一、桑原節雄
E4　岡野徹、長谷川洋一

木原ゼミ同窓会 再開へ向けて

木原正雄先生が逝くなられて、今年で四年になります。

木原ゼミ同窓会は、しばらくの間、休眠状態でしたが、有志が集まり再開することになり、同ゼミ卒業生の新名簿づくり、総会開催（本年十一月二十四日（土）一三時三〇分～一五時三〇分京大 楽友会館にて）の準備が進んでおります。

本文をご覧になった木原ゼミ卒業者の方で、八月末までに、ご案内状が郵送されていない場合は事務局までご連絡ください。

事務局　出田（いでた） 善蔵（ぜんぞう）の連絡先
大阪ガス㈱　秘書部気付
TEL：〇六―六二〇五―四五〇一
FAX：〇六―六二〇五―七二七五
E-Mail：zenzo-ideta@osakagas.co.jp

昭和四十九年入学 経済学部三組の皆様へ

本年四月二十一日に開催いたしました第二回コンパには二十三名が集まることができました。卒業してから初めて再会する方々も多く、旧交を温める本当に良い機会となりました。当日の決議で、49E3のコンパは四年に一度開催することを目標としました。今回に倣い、オリンピックイヤーの四月第三土曜日、夕方四時～九時、京都の「天寅」で行います。

次回は平成二十八年四月十六日です。ただし、決議直後に緊急動議があり二年後にもやろうということになりました。その場合、東京での開催になりそうです。

49E3 第2回コンパ「天寅」にて

《本件に関するお問い合わせ先》
福本康蔵（昭和五十三年卒）
E-mail：cd86a24yu@gaia.eonet.ne.jp

二〇一二年度 神戸地区同窓会

七月十一日に十三名が参加して同窓会が「西村屋ダイニング」で開催されました。大阪、京滋奈、神戸の三支部が昨年十二月に近畿支部として統合したあとの最初の神戸地区の同窓会。今年もインフォーマルな雰囲気での楽しい懇親会でした。現在、五十二名の卒業生が神戸地区会員として登録されています。京都大学経済学部から来ていただいた宇仁宏幸教授からは東アジア研究センターをはじめ、経済学部の活動の状況をご説明頂きました。その後、参加者全員が近況報告。神戸地区会長の本山美彦大阪産業大学学長は、私学の生き残りをかけて悪戦苦闘されていますが、ユーモアいっぱいに話されました。今回は大阪人の歩く速度ついての観察も披露していただきました。毎朝の通勤時にはとても早足で、先生をどんどん追い抜いてゆくとのことです。しかし、面白いことに夕方には先生は別の発見をされます。ご自身は我が家に向かって活き活きと歩くけれど、大阪人は反対で、仕事で疲労困憊しているのか、その歩く速度の遅さに驚くそうです。

野尻賢司（昭和四十四年卒）
（有）パフォーマンス・マネジメント研究所気付
メールアドレス　nojirijin@jijimio-mail.jp

菱山会のご案内

昨年の大震災のため菱山会が延期になり誠に残念でした。幹事役四十二年卒の皆様には諸準備をして頂き有難うございました。平成二十五年二月十七日は菱山泉名誉教授の七回忌命日となります。四年振りとなります先生の七回忌法要の菱山会を二月十六日（土）に開催いたします。日程は奥様とご相談させて頂き、十二時南禅寺でのお墓参り、十三時より京大楽友会館で懇親会としました。後日今回の幹事役五十年卒より詳細をご案内いたします。

一一会開催のお知らせ

故小野一一郎先生の十七回忌の集いを開催いたします。案内状は十月十日頃、送付する予定です。十一月を過ぎても案内状が郵送されない場合は、ご連絡をお願いします。宣代奥様もお元気で皆様にお会いできるのを楽しみにされておりますので、是非ご出席ください。

日時：平成二十四年十二月一日（土）十三時～十六時
場所：新・都ホテル　京都市南区西九条院町十七（京都駅八条口）
会費：一万円（含む写真代）
※最初に集合写真（当日お渡しできます）を撮影しますので時間厳守で集合願います。

世話人：
今村禎彦（三期、昭和三十九年卒）
吉村昭道（五期、昭和四十一年卒）
お問い合わせ先：
新日本コンピュータマネージメント㈱
吉村昭道
TEL：〇六―六三四五―二五八五
E-Mail：akimichi-yoshimura@scm-net.co.jp

コモンルーム

平成二十四年十月、みずほファイナンシャルグループ、三井住友銀行、京都銀行からの寄付金等を利用させていただいて、経済学部東館三階に「コモンルーム」が完成しました。コモンルームは、教職員、学内外のお客様、卒業生の方々に、くつろいだ雰囲気の中でご歓談、打ち合わせなどに利用して頂けるスペースを提供するという目的で作られました。コモンルーム内には、十名様までご利用可能な会議用テーブルもあります。会議スペースは、完成以来、卒業五十周年記念同窓会開催にあたり、幹事・世話役の方々の打ち合わせなどに使って頂いております。（※要予約）

会議スペース

経済学部・研究科としましては、コモンルームをひとつの拠点とし、経済界、同窓会との交流をさらに深めていきたいと考えておりますので、OBの皆様もぜひ積極的にご活用いただければ幸いです。

なお、コモンルームは自動キーロックシステムを採用しておりますので、ご利用されるOBの方は、まずコモンルーム東隣の同窓会事務局にお立ち寄りください。

同窓会事務局
平日（月～金）
午前十時より午後四時
土・日・祝　休
（〇七五）七五三―三四一九

談話スペース